学校法人 松翠学園
滋賀文教短期大学
SHIGA BUNKYO JUNIOR COLLEGE

「石山寺源氏閒紫式部影讃」に描かれた〈紫式部の硯〉　―附録「石山寺由來略縁起」「石山寺名所之圖」ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-05-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池田, 大輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32125/00000106

「石山寺源氏閒紫式部影讃」に描かれた〈紫式部の硯〉―附録「石山寺由來略縁起」「石山寺名所之圖」―

池田　大輔

抄録：

石山形と呼ばれる特殊な彫刻が施された石山寺什物の硯は、紫式部が『源氏物語』起筆の際に使用したという伝説の宝物である。その硯を描いた「石山寺源氏閒紫式部影讃」について検証すべく、石山形硯を最初に描いたと思われる『東海道名所図会』と照らし合わせてその全貌を明らかにする。『源氏物語』の享受史、特に源氏物語起筆伝説の享受に「石山寺源氏閒紫式部影讃」を位置づけるものである。

キーワード：源氏物語石山寺起筆伝説、紫式部の硯、石山寺源氏閒紫式部影讃、石山寺由來略縁起、石山寺名所之圖

はじめに

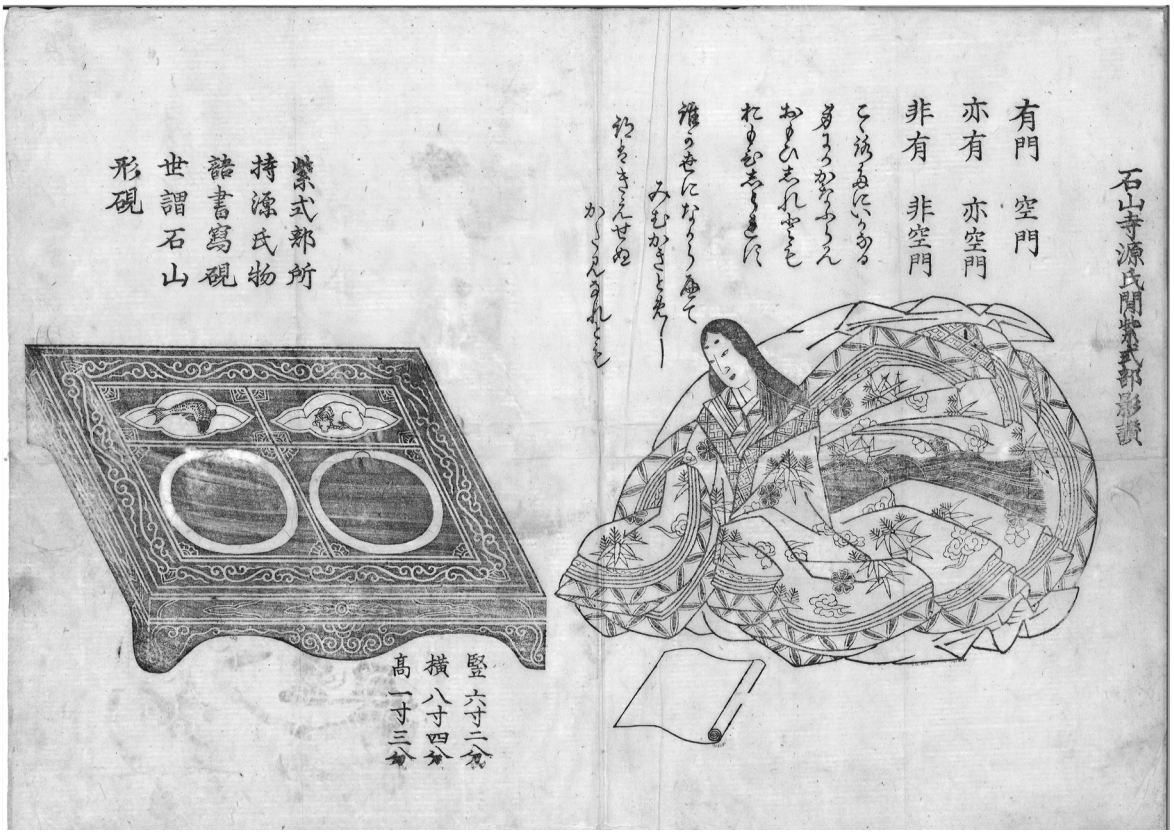
『源氏物語』を紫式部が書いたというのは本当なのだろうか。『源氏物語』と紫式部はセットにして語られることが多いが、それは一体いつ頃からなのだろうか。

現代において『源氏物語』と紫式部は、作品と作者という関係で結ばれ説明されることが多いが、それは時代を遡っても『源氏物語』と紫式部はセットで考えられていたようである。古くは平安時代末頃からとされるが、それは大斎院選子の要請で紫式部が『源氏物語』を書いたとか、石山寺の観音に祈念して『源氏物語』を書くことができたといった起筆に関わる伝説として、また、その結果地獄に堕ちた、はたまた実は紫式部は仏の化身だったなどという、現実的なものから明らかに伝説の域を出ないものまで、いずれも『源氏物語』と紫式部がセットで語られている。そこに付随して観音信仰や仏教思想が逸話として組み込まれていった。これらの伝説については、伊井春樹氏(1)や、三角洋一氏(2)の論考に詳しい。それら『源氏物語』に関する伝説の多くは院政期に誕生し、江戸時代に広く伝播し人口に膾炙していった。現代では、伝説が息を潜め、明治以降の近代的な作者と作品の関係に据えられているが、江戸時代以前は専ら伝説の方が主流で、石山寺への寺社巡拝の流行り等と相まって『源氏物語』という作品の価値を高めていた。

そうした伝説は、江戸時代には多く絵として視覚化されて享受、伝播、記憶されていた。本稿では、そういったメディアの一つである「石山寺源氏閒紫式部影讃」という一枚の墨摺に注目したい。それは、別稿で紫式部が執筆のときに使用したという伝説の〈紫式部の硯〉が誕生したことについて論じた際(3)、詳しく検証できなかった墨摺の位置づけと紹介も兼ねる。

一　概要と年代考証

図1に示した「石山寺源氏閒紫式部影讃」は、成立年代、作者未詳の一枚の墨摺である。絵師、彫師、摺師についても一切の情報がない。唯一分



【図１】「石山寺源氏間紫式部影讃」（架蔵）

かる情報としては、大きさであるが、横四三・三糎×縦三一・六糎、無辺である。同種のものは、国立国会図書館、早稲田大学図書館九曜文庫をはじめとして、京都女子大学図書館、西尾市岩瀬文庫など複数の機関に所蔵されていることから、石山寺の参詣者に頒布していたものであったと考えられる(4)。また、早稲田大学図書館蔵や西尾市岩瀬文庫蔵のものは、墨が薄かったり、摺りが斜めになっていたりと玄人による摺りの可能性は低く、石山寺の名所「源氏の間」とそれにまつわる逸話を広く知ってもらうことを目的とした石山寺関係者の手によるものであろう。

江戸時代には、寺社の宝物や由来を記した墨摺が数多く頒布されるようになる。それらは、「略縁起」と呼ばれ、江戸版パンフレットであり、江戸時代後期には、それらを収拾し合本した「略縁起集」も出てくる(5)。また、久野俊彦氏が、「十七世紀後半の名所記の時代には、寺社では一枚ものの名所記とともに、一枚刷りの略縁起が板行されていた」(6)と述べるように「石山寺源氏間紫式部影讃」は、石山寺監修のもと製作、摺られた石山寺の名所記としての性格を持つ略縁起である。

製作年代については不明であるが、「国立国会図書館所蔵江戸期以前寺社縁起関係目録」の中に収蔵されていることから、江戸時代以前ということになろう。また、京都女子大学図書館蔵の一枚は、略縁起集の性格を持つもので、寺社縁起の一群として巻子仕立てにした跡、及び同一人物による書込みがあり、「収集した略縁起を巻子本に整理した巻子装略縁起集というだけのものに止まらず、略縁起を利用して綴った旅日記というに相応しい側面を有する」「天保九年以降の約八年間に三度「上方見物」に出かけている」(7)ことなどから、天保九年（一八三八）から慶応元年（一八六五）に見物・参詣収集していることが指摘されている。なお、この一群にある「三井寺由来」（弁慶と引摺鐘の絵、縁起を掲載する一枚摺）には、「天保九戊歳予十九歳之節／始而上方見物ス」、「三井寺霊鐘之図」（弁慶引摺鐘の絵、一枚摺）には「弘化三年六月参詣ス」の書込みがあり、この時に石山寺へも見物に行き「石山寺源氏間紫式部影讃」を入手した可能性も考え

られる。

これら京都女子大学図書館蔵の書込みをもとにすると、「石山寺源氏間紫式部影讃」の成立は、少なくとも天保九年（一八三八）から慶応元年（一八六五）を含む江戸時代後期であったと考えられる。但し、石川透氏は、自身が所有する略縁起類をまとめた「略縁起一枚物一覧」において、近代の刊行としているが(8)、刊記に関する典拠は示されていないため理由は不明である。これについては、第二節で後述する。

また、図1硯絵の上部には、「紫式部所持源氏物語書寫硯世謂石山形硯」とあり、この硯が「石山形硯」と呼ばれていることが分かる。そして、この硯絵に関する記録で最も古いものは、管見の限りでは秋里籬島の『東海道名所図会』（寛政九年〈一七九七〉刊）巻二「石光山石山寺」の六丁表の挿絵である（図2）。図1と図2を見比べてみると、墨を磨る丘に若干の差異が認められるものの、同一の硯を見て描いたものだと言えよう。図2の右上には「石山寺什寶／紫式部古硯／世謂二石山形一」（／は改行を示す。以下同じ）と記され、紫式部が所持していたという硯は石山寺の什宝だという。硯の名称と大きさの記載は「石山寺源氏間紫式部影讃」と同じである。左上には、取材に同行したと思しい鶴山畑維竜（延享五年〈一七四八〉～文政十年〈一八二七〉、八十歳没）が石山寺参籠の紫式部に思いを馳せて詠んだ七言絶句「風藻空余湖上秋／泓澄呑月水悠々／濡毫紫女今何在／一片研池萬古留」を載せている。編者の秋里籬島は、京都在住の俳人で、絵師を連れて各地を取材し、または在地の絵師に取材した内容を描かせるなどして『東海道名所図会』を完成させている。秋里籬島が、石山寺へ赴き、実見したと思われる石山形硯については、「硯石」という項目を立てて、次のように述べている(9)。

【図2】「東海道名所図会、巻二、6丁表」（国立国会図書館デジタルコレクション）

> 源氏の間の霊宝とす。式部が所持の硯にて源氏をかけるといふ。此石は原石山の石にて紫色瑪瑙のよし。また彫刻を石山形といふ。都て一面の硯に海二ッあり。額に牛鯉の形を彫りて左右にわかつ。海の二面あるは日月陰陽の象を顕し鯉の方は濃シ。牛の方は淡也。

この硯が紫式部所持のもので『源氏物語』を書いたというのは、「といふ」伝聞形式で記すが、石山形の解釈については、断定「也」で締めくくっているように、納得した事実として記している。ここで、「石山形」とは、丘が二面、海が二面その中に牛鯉が彫られた硯の彫刻であることが分かる。

さて、同じく石山寺へ赴き、伝説の真偽を尋ね、それを記録した人物がいる。江戸時代前期の国学者、安藤為章（万治二年〈一六五九〉～享保元年〈一七一六〉、五十八歳没）である。為章は『紫家七論』（元禄十六年〈一七〇三〉刊）の中で、次のように述べている(10)。

> 為章若きほど此河海の説を信じ、彼自筆の般若見まほしくて、石山にて相知れる坊に逗留して、其事をたづねさぐり侍りしに、はやく空言にて侍し。但源氏の間と名付けて、式部が画像をかけて、此ころの様の机、硯など設たるは、いづれの世、何の人の好み事にや。

為章が石山寺へ行くきっかけとなった「河海の説」とは、南北朝時代の

四辻善成による注釈書『河海抄』（貞治元年〈一三六二〉頃成立、後増補）の巻第一、料簡に記された源氏物語石山寺起筆伝説のことである。為章が石山寺へ実際に赴いた時期は分からないが、「此ころの様の机、硯」と記すように、源氏の間には紫式部の画像が掛けてあり、当世風の机や硯が置かれていたのである。つまり、『紫家七論』が刊行された一七〇三年には「源氏の間の霊宝」であるはずの「石山形硯」を確認できなかったのである。「石山形硯」は、霊宝なので秘蔵の品として宝物館等で保管し、容易に披見することはできなかったかも知れない。しかし、「相知れる坊」という伝があった為章が硯について尋ねていてもおかしくはない。為章は〈紫式部の硯〉について知っていた可能性があり、「此ころの様」という書きぶりがそのことを示しているのではないか。一方、石山寺が、源氏の間に「此ころの様の机、硯」を設置していたのは、〈紫式部の硯〉が参詣者を呼び込むための名物としていなかったということであろう。名物としていたならば、「式部が図像」[11]とともに、レプリカにせよ「石山形硯」を配置していたはずである。なお、現在の源氏の間に座す紫式部像とともにある硯は「石山形硯」ではない。

石山寺に参籠した紫式部が『源氏物語』を起筆したという伝説は、江戸時代中期頃には広く流布し、「石山寺としても巷間の話に対応した設備を整えるようになるのは、必然なりゆきであろう」[12]と伊井春樹氏が指摘するように、伝説に従って目玉となる新たな逸品として「石山形硯」が誕生、もしくは名物として表面化した可能性は高い。ともあれ、秋里籬島が取材し、刊行した寛政九年（一七九七）には、「石山形硯」が実在して、絵にした影響は大きい。『東海道名所図会』は、爆発的人気で売れたのであるから、そこに描かれた「石山形」と呼ばれる〈紫式部の硯〉は、『東海道名所図会』を通して広く知れ渡ったであろう。各地の名所、寺社巡拝が盛んに行なわれていた江戸時代において、遠く離れた江戸や地方からも『東海道名所図会』に描かれた〈紫式部の硯〉を一目見ようと参詣者たちが訪れ、また硯についても尋ねられたに違いない。そういった人々の往来の中で、石山寺の新たな名物「石山形硯」を描き込んだ「石山寺源氏間紫式部影讃」が誕生したものと考える。

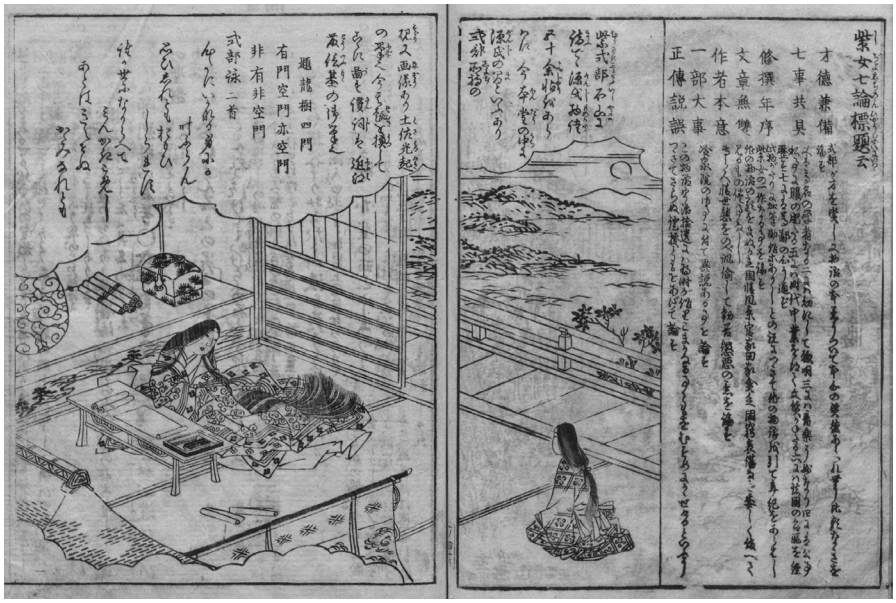
つまり、「石山形」と呼ばれる〈紫式部の硯〉は、『紫家七論』（一七〇三年）の江戸時代前期には存在が確認できなかった→江戸時代前期から中期にかけて紫式部の伝説の流布と関連して誕生→『東海道名所図会』（一七九七年）に描かれる→「石山寺源氏間紫式部影讃」（一八三八～一八六五年）に描かれるという流れを提案したい。

ここでの『東海道名所図会』→「石山寺源氏間紫式部影讃」という順序については、『近江名所図会』（文化十二年〈一八一五〉）を介入することで補強したい。秋里籬島は、十一もの名所図会を著わしているが、秦石田とともに編集した『近江名所図会』は、『伊勢参宮名所図会』（寛政九年〈一七九七〉）、『木曽路名所図会』（文化二年〈一八〇五〉）、『二十四輩巡拝図会』（享和三年〈一八〇三〉）の三書のうち、近江関係記事を抜き出し一書にまとめたもので、『伊勢参宮名所図会』は秦石田が担当し、西村中和が挿絵を担当している[13]。念のため、確認してみたところ、石山寺に関する『近江名所図会』（巻一、四十丁裏～四十六丁裏）と『伊勢参宮名所図会』（巻一、四十丁裏～四十六丁裏）は完全に一致している。

つまり、刊行年に注目してみると、『東海道名所図会』と『伊勢参宮名所図会』は同年刊ということになる。しかし、内容はほぼ同じであるものの、挿絵や硯に関しては違いが認められる。『伊勢参宮名所図会』巻一の「石光山石山寺」には『東海道名所図会』のように硯の説明や挿絵はなく、一丁半（四十五丁裏の半分と四十六丁表）に源氏の間で文机に右肘をつく紫式部が描かれ、上部雲形の中に次のように記されている（図3）。なお、傍線と句読点は私に付したが、ルビや濁点は原文のままとした。

紫式部、石山に詣で、源氏物語五十余帖あらはす。今本堂の中に、源氏の間というあり。式部所持の硯、又画像あり。土佐光起の筆也。今の趣を模してこゝに圖を讃詞す。近江藤信基の補筆也。

題龍樹四門／有門空門亦空門非有門非有門／式部詠二首／
心たにいかなる身にか／叶ふらん／思ひしれともおもひ／しられす／
誰か世になからへて／みんかきとめし／あとはきえせぬ／かたみなれ
とも



【図３】「近江名所図会、巻１」（国立公文書館デジタルアーカイブ）

秦石田は、「式部所持の硯」と記すのみで、石山形硯に関心がなかったのであろうか、詳細な説明はない。『伊勢参宮名所図会』及び『近江名所図会』には、伝説をもとにした紫式部が描かれるものの、その手元に描かれた「硯」は「石山形」ではないのである。むしろ源氏の間の壁か柱に掛かっていた「画像」に興味があったようで、図３は石山寺蔵の土佐光起筆「紫式部図」（江戸時代）を模写したと思われ、全く同じ構図で描いている。土佐光起筆「紫式部図」の上部には三枚の色紙型が配され、それを名所図会にも記している。この色紙型に記された四諦の法門（四門）と式部の和歌二首は、図１にも確認することできる。仮に、秦石田が取材した際に、「石山寺源氏閒紫式部影讃」が、既に石山寺で頒布されていたならば、ここに詳しい硯の説明ないし図を描き込んでもよさそうなものである。

したがって、『伊勢参宮名所図会』以前に「石山寺源氏閒紫式部影讃」が頒布されていた可能性は低く、『東海道名所図会』以後に頒布されたものとして位置づけておくことにしたい。現在残されている史料から、秋里籬島が着目し、『東海道名所図会』で挿絵とともに紹介したことで「石山形硯」を一躍有名にしたと考えられる。さらに、江戸時代には『源氏物語』の梗概書や女訓書、往来物などに源氏物語石山寺起筆伝説が挿絵とともに広く知られていたことも石山寺参詣人気に拍車を掛けたと想像に難くない。「石山寺源氏閒紫式部影讃」は、参詣者の旅の証であり、土産物でもあり、帰って周囲の者に語る際の記憶でもあった。

その影響は、『源氏物語』を翻案した柳亭種彦作、歌川国貞画の『偐紫田舎源氏』（文政十二年〈一八二九〉初編刊、以後天保十三年〈一八四二〉まで三十八編刊。天保の改革により刊行禁止）の初編表紙の見返の扉絵（図４）に、石山形の硯を使用していることからも分かる。種彦は、江戸在住の戯作者で、石山寺へは一度も行ったことがなかったが、『東海道名所図会』や「石山寺源氏閒紫式部影讃」などで石山形硯を知ったのであろう。特に『東海道名所図会』を参照し、前掲の「硯石」の説明に対して次のように述べている(14)。

石山形の硯石は、二ツ連ねて鯉と牛と、木瓜の裡に彫てあるは、濃墨薄墨の印なりと歟。鯉に濃の響きはあれど、牛は何なる由縁歟知らず。…（中略）…偖この草紙の初編の刊行、文政己丑の年なりし。その丑に因あれば、彼古硯を表紙の裏に、写させておきたりしが…（下略）

【図４】「傚紫田舎源氏、初編上、見返」（架蔵）

硯の図柄には疑義を懐いているものの、初編の見返の扉絵に使用したのは、紫式部が後世に残る大作を生み出したように、自分の作品もそうなって欲しいという願いを込めたからであった。石山形硯に一方ならぬ思い入れがあったことは、文政十二年丑年の初編刊行から再び丑年が巡ってきた十二年後の天保十二年刊行第三十六編の序文で感慨深げに述べている。

ここで、「石山寺源氏閒紫式部影讃」の年代考証について整理しておく。

①石山寺名所記の性格を有する略縁起として頒布されていた。

②頒布時期は、少なくとも天保九年（一八三八）から慶応元年（一八六五）。天保九年（一八三八）を遡る可能性もあるが、『東海道名所図会』が刊行した寛政九年（一七九七）以前を遡らない。

③『東海道名所図会』に描かれる「石山形硯」と同一の硯を見て描いた。前後関係は『東海道名所図会』の方が先かと考えられる。

④同一の板木で大量に摺り、明治時代以降も摺られた（後述）。

次に、描かれている内容について少し見ていくことにする。

二　伝説の可視化

石山寺の略縁起にあたる一枚の題字には「石山寺源氏閒紫式部影讃」とある。これは、「石山寺」の本堂南東にある「源氏間」に「紫式部」が参籠し、『源氏物語』を著したことを「影讃」するものである。記されている内容は、三条西実隆による詞書と土佐光信による絵の『石山寺縁起絵巻』巻四（明応六年〈一四九七〉）で語られる石山寺観音霊験譚と『源氏物語』起筆を可視化したものである。以下に、『石山寺縁起絵巻』の本文を引用する(15)。

紫式部は、右小辨藤原為時朝臣か女。上東門院の女房にて侍けるに、一條院の御をは選子内親王より、めつらしからん物語や侍と女院へ申されたりけるを、式部におほせられて、つくらせられけれはこの事を祈申さむとて、當寺に七ヶ日こもり侍けるに、水うみのかたはるくと見わたされて、心すみてさまくの風情眼にさへきり、心にうかみけるをとりあへぬ程にて、料紙なとの用意もなかりけれは、大般若の料紙の内陣にありけるを心の中に本尊に申うけて、思あへぬ風情書つゝけける。彼罪障懺悔のために大般若経を一部かきて奉納しける。いまに當寺にありとそ。この物語かきけるところをは、源氏の間と名つけて、その所かはらすそ有なる。彼式部をは日本紀の局とて、観音の化身とも申つたへ侍り。

「石山寺源氏閒紫式部影讃」には、大斎院要請に関わる記事が削除されているが、石山寺の略縁起として問題はなく、むしろ「紫式部」「大般若経」「石山形硯」という石山寺にまつわる伝説が可視化されていることに意味がある。紫式部が見つめる視線の先には、『東海道名所図会』が説明していた「月」を意味する丸形の硯の丘があり、さながら湖面に映る満月を見ているさまを描いている。『石山寺縁起絵巻』の詞書には「月」は語られ

ないが、詞書に続く第1図には、源氏の間から「水うみのかたはるゝ〳〵と見わた」す紫式部、第4図には「水うみ」に映る月が描かれている。「石山寺源氏間紫式部影讃」（図1）の紫式部の手元には「大般若の料紙」があり、今まさに「心にうかみける」物語を書こうとしている。そして、まず目に入るのは、その大きな「石山形硯」であろう。この一枚の墨摺は、「石山形硯」を前面に押し出し、「源氏の間の霊宝」であることを強調している。それは、前節で述べたように、『東海道名所図会』に「石山形」が描かれ喧伝され、その存在を知った参詣者の往来と無関係ではあるまい。そして、「石山寺源氏間紫式部影讃」は一枚全体で「源氏の間」の空間を演出している。

なお、図1の紫式部の前に描かれた料紙の巻物は一部が欠けている。これは、国立国会図書館蔵、早稲田大学図書館九曜文庫蔵、西尾市岩瀬文庫蔵のものも同様であるが、京都女子大学図書館蔵のものには欠けがない。これは、大量の摺りを経て、摩耗・劣化で破損して欠けたのであろう。つまり、欠けがなく江戸時代後期の書込みを持つ京都女子大学図書館蔵が、最も古く摺られたもので初摺りだと言える。板木が欠けたものは、後摺りとして相当数摺ったことが分かる。つまり、前節で石川氏が近代刊行とするのは、明治時代に入ってからの後摺りの可能性が考えられる。

ところで、注目すべきは「源氏間」の「間」の文字で、よく見ると「間」ではなく、もんがまえの中が「月」となっているのである。『石山寺縁起絵巻』の詞書にはないが、言うまでもなく物語の着想を得るきっかけとなった「琵琶湖に映る月」を意味していよう。『源氏物語』と紫式部をセットで語る最も古い伝説の「物語のおこり」とされる伝為氏筆本『源氏古系図』の序文には「石山にまうて、いのり申すに、八月十五夜の月水海にうかひてあきらかなるをみて、心のすみけるに」(16)と「八月十五夜の月」＝「満月」のことが記され、梗概書『源氏大鏡』（南北朝時代頃）や、注釈書『河海抄』などにも「八月十五夜の月」が強調されている。江戸時代には、この伝説が多く絵画化されて流布したが、「石山寺源氏間紫式部影讃」もそういった伝説に肖ったことをこの一字が示している。

次に、紫式部の構図を比較してみると、「石山寺源氏間紫式部影讃」は、源氏の間に掛けられていたという伝狩野孝信筆「紫式部図」（一幅、桃山時代）をもとにして描かれたものと思われ、ほぼ一致している。また、その上部に記された文言は、石山寺蔵の伝狩野孝信筆「紫式部図」（一幅、桃山時代）や土佐光起筆「紫式部図」（一幅、江戸時代）、狩野岑信筆「紫式部図」（一幅、江戸時代）の上部にある三枚の色紙型と同じ順番で記されている。一番右の漢文体で書かれた「有門／空門／亦有／亦空門／非有／非有門」については、早くに『源氏物語』和歌の梗概書である今川範政の『源氏物語提要』（永享四年〈一四三二〉成立）「発端」が詳細に述べており、そのほか注釈書で一条兼良の『花鳥余情』（文明四年〈一四七二成立〉「桐壺」や、梗概書で野々口立圃（ののぐちりゅうほ）の『十帖源氏』（承応三年〈一六五四〉頃成立。万治四年〈一六六一〉刊）の序文などに説明があるように、早くから知られていた。内容は、『源氏物語』の巻の数は、天台教六十巻（現在、五十四帖）をもとにして作られ、巻の名前は、四諦（したい）の法門（仏教が説く真理）「有門、空門、亦有亦空門、非有非空門」をもとに名付けた。「第一に物語本文から、第二に和歌から、第三に本文と和歌から、第四に本文にも和歌にもないところから」という『源氏物語』を仏教とを絡めた巻名説明となっている。『源氏物語』の巻名については、清水婦久子氏が詳細な検討を加えられている(17)。

次いで、二種の和歌については、それぞれ『紫式部集』の五六、一二七番歌として入集している。

こゝろたにいかなる／身にかかなふらん／
おもひしれとも／おもひしられす
誰か世にながらへて／みむかきとめし／
跡はきえせぬ／かたみなれとも

この二首については、伊井春樹氏が、神宮文庫蔵『紫式部石山寺歌柱之詠』に「右二首、石山寺の源氏の間に、紫式部が書き付けり。今に至るに、歌の柱とて自筆にあり」と指摘され、「紫式部図」との関わりから、「〈源氏の間〉における紫式部の二首の歌、それは伝説にまつわる画題であったものと思われる」と述べられている[18]。なお、『東海道名所図会』は伝狩野孝信筆「紫式部図」、『近江名所図会』は土佐光起筆「紫式部図」が「源氏の間」にあると説明し、上部の色紙型の文字は、ともに近衛三藐院信基（永禄八年〈一五六五〉～慶長十九年〈一六一四〉、五十歳没）が画讃として筆を執ったことを記している。この紫式部の二首もまた、石山寺と紫式部を繋ぐ伝説の一部として語り継がれていたということであろう。

「石山寺源氏間紫式部影讃」とは、石山寺源氏の間の霊宝である「紫式部図」（伝狩野孝信筆、土佐光起筆、狩野岑信筆）を右面に、紫式部が使用した「石山形硯」を左面に配置し、一枚全体で「源氏の間」を表現することで、源氏物語石山寺伝説を端的に可視化した一枚の略縁起である。それは、江戸時代の版本の口絵や浮世絵師たちが描いた石山寺で月を眺める紫式部で、源氏物語石山寺伝説を可視化したのとは異なり、石山寺源氏物語起筆伝説を略縁起として特化し表現された一枚なのである。

三　「石山寺由來略縁起」と「石山寺名所之圖」

最後に、「石山寺源氏間紫式部影讃」と関わる二枚の墨摺を併せて紹介する。まず「石山寺由來略縁起」（図５）は、題字の通り石山寺の由来を記し、一行分の空白の後、源氏物語石山寺起筆伝説を記す。大きさは、横四一・一糎×縦三一・五糎、四周単辺で、「石山寺源氏間紫式部影讃」とほぼ同じ大きさである。次に、「石山寺名所之圖」（図６）は石山寺の地図となっており、「源氏の間」も現在の場所、外形は同じで描かれている。二枚とも年代等不明であるが、「石山寺名所之圖」を入手する際に参照した「和の史」[19]では、江戸時代後期と記載されている。大きさは、横三七・八糎×縦二四・六糎、四周単辺と、先の二枚と比べるとやや小さい。

参考までに、「石山寺由來略縁起」の源氏物語石山寺起筆伝説を翻刻する。句読点と傍線は私に付したが、ルビや濁点は原文のままとした。

【図５】「石山寺由來略縁起」（架蔵）

【図６】「石山寺名所之圖」（架蔵）

紫式部は、右小辨藤原為時朝臣が女。上東門院の女房にて侍りけるに、一條院の御を伯母選子内親王より、めづらしからん物語や侍ると女院申されたりけるを、式部におほせられて、作らせられけれは、此事をいのり申さんとて、當寺に七ケ日籠り侍けるに、湖のかたはるくと見わたされて、心もすみてさまぐの風情まなこにさへきり、心にうかみけるをとりあへぬほどにて、料紙なとの用意もなかりけれは、大般若の料紙の内陣にありけるを心のうちに本尊に申うけて、思あへぬ風情を書つゝけける。彼罪障懺悔のために大般若経を一部書て奉納しける。今に當寺にあり。又この物かたりを書けるところを、源氏の間となづけて、其所かはらず有。かの式部をは日本紀の局とて、

観音の化身（けしん）とも申つたへ侍り。

前掲の『石山寺縁起絵巻』と同じ文章であるが、石山寺什物に関わる箇所については、伝聞から断定へと文言が変更されている。たとえば、紫式部自筆の大般若経「いまに當寺にありとそ」が「今に當寺にあり」、源氏の間「その所かはらす有なる」が「其所（そのところ）かはらず有」のように伝聞譚ではなく、石山寺に伝わる事実として紫式部自筆の大般若経と源氏物語を起筆したという源氏の間を略縁起として頒布するにあたり据え直している。

おわりに

「石山寺源氏間紫式部影讃」「石山寺由來略縁起」「石山寺名所之圖」は、石山寺の名所記の性格を有する略縁起として、大量に摺られ参詣者たちに頒布された江戸版パンフレットであった。特に「石山寺源氏間紫式部影讃」は、源氏物語石山寺起筆伝説に特化した一枚で、名所の「源氏の間」及びその霊宝「紫式部図」「石山形硯」を具現的に視覚化している。

その成立は、江戸時代後期かと思われるが、頒布用に大量に摺られ、明治時代以降も摺られたと考えられる。その判別の基準としては、描かれた紫式部の前に置かれた料紙の巻物の一部の欠けの有無である。一概には言えないが、仮に欠けていないものが江戸時代後期の初摺り、欠けているものが明治時代以降の後摺りとしておく。

現代の石山寺においては、「石山形硯」は宝物館の豊浄殿で展示されるが、江戸時代の『東海道名所図会』や「石山寺源氏間紫式部影讃」のように図示して全面的に喧伝してはいない。それは、江戸時代における、石山寺源氏物語起筆伝説の流布は、源氏関連書物だけではなく、往来物などの学習書などの出版物にまで広く載せられたことで、享受、伝播、記憶されていた時代性と相まっての需要であったからである。時代が経て、伝説が伝説となってしまったことで、「石山形」という〈紫式部の硯〉は、再び石山寺の什物として息を潜めることになったのである。〈紫式部の硯〉に光が当たることを願い、稿を閉じることとする。

注

（1）伊井春樹『源氏物語の伝説』昭和出版、一九七六年。

（2）三角洋一「源氏物語伝説」『源氏物語講座』第八巻、勉誠社、一九九二年。

（3）拙稿「源氏物語石山寺起筆伝説と〈紫式部の硯〉―〈紫式部の硯〉の誕生と視覚化―」『平安朝の物語と和歌』新典社、二〇二三年七月刊行予定。〈紫式部の硯〉の絵画化について論じたもので、併せて読んでいただければ幸甚である。

（4）それぞれの図像については、デジタル公開されているもので確認した。京都女子大学図書館蔵は、中前正志、千葉郁恵「京都女子大学図書館蔵『〔寺社縁起由来〕』目録稿―巻子装略縁起集に綴った旅日記―」『国文論藻』（第十九号、二〇二〇年三月）に掲載されたものを確認した。

（5）中野猛「略縁起の世界 縁起説話の形態・性格・分類」『略縁起集の世界 論考と全目録』山崎裕人・久野俊彦編、森話社、二〇一二年。

（6）久野俊彦「一枚刷り略縁起の形成」『遊楽と信仰の文化学』堤邦彦・徳田和夫編、森話社、二〇一〇年。

（7）注4前掲論文。なお書込みは、「丸屋六右衛門泊リ。名産うなぎ／蒲焼、大平へ入出ス。其外、なまず／風味よろしくぞ」と宿泊先や料理、その感想が記されている。

（8）石川透「略縁起の二形態」（注6前掲書所収）。『略縁起一枚物解題図録』（慶應義塾大学絵入り本研究会、二〇〇九年八月）には、白黒図を掲載しているが、「近代刊」とする説明はない。なお、図が不鮮明だが、料紙巻物の欠け部分には補筆したような跡が見られる。

（9）『東海道名所図会』の本文引用は、国立国会図書館デジタルコレクション（DOI：10.11501/2563512）に依って翻刻し、ルビや濁点は原文のまま、句読点は私に施した。

（10）『紫家七論』の本文引用は、『近世神道論　前期国学』（日本思想大系、岩波書店、一九七二年）に依り、傍線を私に施した。

（11）この「式部が図像」は、伝狩野孝信筆「紫式部図」（一幅、桃山時代）と考えられる。片桐弥生氏によると「長らく源氏の間にかけられていたせいか、剝落などの痛みがひどく、所々補彩も認められる」（「解説」『石山寺と紫式部―源氏物語の世界―』大本山石山寺、一九九〇年）とされる。

（12）伊井春樹「紫式部の石山寺参籠」（注1前掲書所収）。

（13）村井康彦「解説」『近江名所図会』版本地誌大系、臨川書店、一九九七年。

（14）『修紫田舎源氏』の本文引用は、新日本文学古典大系（鈴木重三校注、岩波書店）に依る。第三十六編序。五六二頁。

（15）『石山寺縁起絵巻』の詞書本文は、日本絵巻物集成（巻十九巻、雄山閣、一九三二年）に依り、句読点を付した。

（16）『源氏物語大成』第十三冊、普及版、中央公論社、一九八五年。

（17）清水婦久子『源氏物語の巻名と和歌　物語生成論へ』和泉書院、二〇一四年。

（18）伊井春樹「源氏の問」（注1前掲書所収）。

（19）『和の史』思文閣古書資料目録、思文閣出版古書部、第二七四号、二〇二二年七月。六六頁。

池田大輔　国文学科准教授・日本古典文学（平安朝文学）